Hacker☆J

時の雫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈａｃｋｅｒ☆Ｊ

【Ｎコード】
Ｎ０２０８Ｆ

【作者名】
時の雫音

【あらすじ】
主人公ルレルトは大学生。いつも授業中は眠りこけ、何かある度に相棒であるロヴェンに任せきり。しかしこれは、ルレルトの表の姿。表があれば裏もあるわけで・・・その裏の姿とは？裏で何をしているのか？

第1話：～Ｔｈｅ　Ｅ－ｍａｉｌ　Ｃｈｅｃｋ～（前書き）

ハッカーと聴いて、悪者の意味を連想しているかもしれませんが、ここでは、コンピュータの精通者、つまり専門家としてお考えください。

この小説ではハッカー＝インターネット犯罪を取り締まる警官のイメージで書いております。

最後にＰＣの知識いるのでは？と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、なくても全然大丈夫ですｂ

第1話：～The E－mail Check～

”ＰＣ法律第２３条１項
非なるサイト及び掲示板に誹謗中傷を行ったものに対し、
特定を行い、ＰＣの使用不可にする権限をハッカーに与える。”

”ＰＣ法律第３４条
個人の特定できるようなデータを発見した場合、速やかに回収し、
漏洩を阻止する権限をハッカーに与える ”

知られているようで意外と知られていないＰＣに関する法律。
一部ハッカーのみしか知られていない法律。
このラルース王国でつい最近施行された法律だ。
国では面倒が見きれぬ程ネットワークの犯罪が横行し、苦難の決断の末、
コンピュータに関しては専門家に委ねることにしたのだ。
そうコンピュータの専門家ハッカーに権限を与えたのだ。
ラルース王国のネットワーク犯罪を減らすために与えたのだ。
この王国の人口がおよそ１０５３万人、そのうちハッカーがわずか１％の１０万人弱。
どう見てもハッカーが少ない・・・一体国は何を考えているのか分からないと
不平を言うハッカーも少なくはない。
それとは逆にこれを機会に、ビジネスをするハッカーまでもが現れた。
そうこの物語の青年ルレルトもそのうちの一人だった。

バタン。
本を閉じる音が部屋中響き渡る。
ハァ・・・
本を閉じると同時にため息が漏れる。

「最近、特に多いよな・・・ネットに関する誹謗中傷」
ＰＣが置かれたデスク、その椅子に座っているルレルトの声がした。

「ほんとだな・・・もうかれこれ４０件以上ＰＣの使用を不可能にしてきたんだもんな」
ルレルトの隣に、コーヒーを持った青年が言う。
その青年は、ルレルトにお疲れ様といい、コーヒーを差し出した。
「ロヴェン、いつも悪いな・・・やっぱブラックが一番いい」
ルレルトはロヴェンに差し出されたコーヒーを一気に飲み込み、眠気を覚ましていた。
眠気を覚ましたとはいえ、ルレルトは自分のＰＣの前でぐてっとしている
それを見たロヴェンは、親切にも
「僕も手伝うよ、ルレルト。　メールチェックしようか？　お助けのメールが埋もれてるぞ？」
とルレルトに声をかけた。
ロヴェンはルレルトのＰＣの横に自前のＰＣを置き、ＬＡＮをつないで、ルレルトのＰＣと
同じメールチェックの画面を出した。
「了解　メールチェックはしとくから少し休め、なぁ？」
ロヴェンがルレルトに声をかける。
「うん、ちょっと仮眠取るから頼むよ、ロヴェン」
ルレルトが椅子から立ち上がり真後ろにあるベッドでごろごろし始める。
５分もしないうちに寝息が聞こえてきた。

相当お疲れのようだ。

「ええと、メールの受信は・・・・８２３５通！？　いくら何でも多すぎだろ・・・」

数の多さにロヴェンが呆然とし、ため息が漏れる・・・。

ネットワーク犯罪はいくら法律が施行されたとはいえ、なかなか減らないものである。

それに今は、真夜中の２時。

普通の大人ならもう寝ている時間だ。

当然、１通１通あけていっては、いつ終わるのか分からない。

もしかしたら緊急のメールを逃してしまい、助けを求めている人の声が届かないともなると

非常に悔しい話である。

ルレルトとロヴェンはそれを防ぐために、ツールを作った。

優先順位をつけるツールだ。

「さて、いつものようにｃｈｋｍａｉｌ．ｅｘｅぽっちっとな・・・」

ロヴェンはメール画面に埋め込まれているｃｈｋｍａｉｌ．ｅｘｅ（メールの優先順位をつけるツール）を押した。

優先順位は、緊急　後回しでもＯＫ　ファンレター　スパイウェア自動削除の順だ。

緊急は、どこかのサイトに個人のデータが貼り付けられ嫌がらせをされ至急駆除が必要なものに対して振り分けられる。

後回しでもＯＫは、別に急を要していないものに対して振り分けられる。

ファンレターは、お礼のメール用だ。過去にルレルトたちに助けられた人たちからのメールがここに振り分けられる。

スパイウェア自動削除は、個人の情報を勝手に盗んでいくものに対

して振り分けがされる。
ハッカーをやっているとスパイウェアが特に多く振り分けられる。
なのでちゃんと処理を施してやらないと、ＰＣがパンクし使用が不可能になってしまう
危険性が高い。
なので多くのハッカーは、スパイウェアの対策は常日頃から取るようにしている。

「さすが、優秀君だね、１分５０秒で振り分け完了するとは・・・
どうせ、今日も緊急性のものはないだろう・・」
ロヴェンがチェックもせずにメール終了ボタンを押そうとしたときだった。

ジリジリジリジリジリ・・・・
ルレルトとロヴェンの部屋に、いつも聞き慣れない音が響き渡った。

ルレルトのＰＣからだった。
ＰＣの主を起こすかのように響き渡る音がする。
深夜２時半のことである。

「ろう〝ぇん？ふにゃふにゃ・・・メール・・・ふにゃ・・・」
寝ぼけすぎて言葉になっていないルレルトがゆっくりと起き上がる。

「ルレルト、大変だ！　珍しく緊急のところにメールが振り分けられた！！」
ロヴェンは座ってた椅子を立ち上がり、起きたばかりのルレルトを更に目を覚まさせようと
ルレルトの体を揺する。
「ふぁにあぇご・・・はぁっ！！」
ルレルトがロヴェンの声に反応し、意識を完全に取り戻す。

「ロヴェン、この音・・・緊急の依頼！！　すぐにシーク（探索）だ！！」

飛び起きたルレルトはすぐさま自分のＰＣに目をやった。

そこには緊急に振り分けられた１通のメールの至急開封確認を行うメッセージが表示されていた。

ルレルトはすぐさまＯＫを押し、おそるおそるメールを見てみた。

「これは・・・！！」

「・・・！！　なんという・・・」

メールを見て２人は同時にお互いの顔を見合わせて言った。

背筋が凍りそうな内容に２人は怖じ気づくかのようだ。

そんな内容でもハッカーはびびってはいけない。

彼らの見たメールの中身はいかに・・・。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

初めまして、この度はＨａｃｋｅｒ☆Ｊの訪問有難うございます。

いかがでしたか？

まだまだ未熟な点が多いと思いますが、よろしくお願いします。

最後に、この小説をここまで読んでくださり有難うございます。

ｂｙ　作者

第1話：～Ｔｈｅ　Ｅ－ｍａｉｌ　Ｃｈｅｃｋ～（後書き）

ハッカーの世界を堪能していただけたでしょうか？
小説を読んでくださり、有難うございます。
まだまだ至らない点があると思いますが、
よろしくお願いします。
あなた様のまたの訪問をお待ちしております。

第2話：～Ｔｈｅ　Ｓｅｃｒｅｔ～（前書き）

緊急に振り分けられたメール・・・。
いったい誰が何のために投稿されてきたのか！！

第2話：～The Secret～

「これは・・・！！」
「！！」

２人は恐る恐るメールの画面に視線を移した。
ＰＣのポップアップメッセージに
『緊急に振り分けられた未読メッセージが１件あります』
と書かれている。
ルレルトとロヴェンは、メールの内容を黙読し始めた。
あたりには彼らしかいないので静寂な雰囲気に包まれる。

”親愛なる　ハッカー☆Ｊ　様へ”

「俺宛（笑」
ルレルトが突っ込む。
さすがＦＡＮが多いだけにルレルトは笑っていた。

（しょっぱなから正体ばらしてどうするルレルト・・・）
ロヴェンが心の中でややあきれ顔でルレルトの方へ視線をやる。

”こないだから私の携帯にいたずらメールが耐えません。
１日およそ１０００通をも超えて送られてくるので、
昨日、ついに私の携帯が使えなくなりました。
原因がさっぱり分からないのです。
友人に相談したけどそれだけは分からないと言われ、

どうしていいのか分からずメールを送りました。
どうかお願いします・・・私の携帯を使えるようにしてください
ＸＸＸＸ．ＸＸＸＸ@ＸＸＸＸ．ＸＸ．ＸＸ　　レニィ”

「緊急と言えば緊急だ、ロヴェン・・・一仕事する？今から」
午前３時、真夜中のメール。
ルレルトたちに届くメールは大抵携帯使えるようにしてとか見知らぬ掲示板で貼り付けられたデータを復活しないよう削除しての依頼が多かった。
このメールも彼らにとってはお手の物。
１０分もすれば何事もなかったように全て元通りにする。

「そうだな、こういうものはさっさとやって睡眠時間を確保したいくらいだね」
ロヴェンがルレルトの方を見て、言った。

（ハッカー☆Ｊか・・・）
ハッカー☆Ｊはハッカー☆Ｊａｃｋの略称で、仕事もやるけどちょっといたずら好きという
意味でロヴェンが銘々してくれた。
オレはあんまし真面目にするタイプじゃないからね・・・たまに手抜き・・・（ぁ
ハッカー☆Ｊは、表社会でも裏社会でも恐れられている存在だ。
ネットワーク犯罪で加害者が特定されれば、容赦なくＰＣを使用不可能にし
多くの加害者たちを泣かせていた。
このラルース王国ではＰＣが生活必需品であり、ＰＣがなければ洗濯できない、
ＴＶ見れない、クーラーのリモコン代わりにもならない、音楽も聴

けない、
勿論ゲームもできない。
それにこの王国でもＰＣの値段は高機能で一生使われるという価値から
１台およそ３０万円するのだ。
つまりすぐには買い換えさせないような仕組みになっている。
よってネットワークで犯罪を行ったらこいつの餌食になると恐れられている。

王国では、ハッカー☆Ｊがルレルトだと知られていない。

何故ならハッカー☆Ｊは、
一、正体がばれることなく活動すること
一、ネットワーク犯罪で加害者がいるときは容赦なく叩きのめすこと
一、王国の密偵ではなく、個人の趣味以内で活動すること
を目標に上げ、個人というかロヴェンと一緒にだが行動している。

ルレルト自体別に秘密主義とかではないのだが、気がついたらマスコミで、
謎の活動団体と騒がれ、裏社会では恐れられ得体の知れないということから
正体は明かすわけにはいかない気持ちがはたらき、今に至る。

「こんな夜にメールをくれるなんてレニィってやつも物好きだな」
ルレルトが冷蔵庫からお茶を取り、飲みながら言う。
「確かに言えてる」
隣にいたロヴェンが頷く。
「ラッキー、このメールアドレスは携帯だな。よし早速追跡しようか」

ルレルトいやハッカー☆Ｊモードの人格を化したルレルトは、まずメールが送られた相手に、
許可を取る。
踏み台にする許可を・・・。

『Ｄｅａｒ　レニィ　様
はじめまして、ハッカー☆Ｊだ
メール見たぞ。携帯の容量が限度に来たから自動で使用を禁止したわけだ。
ま、これ以上使うとやばいと思っての判断だ、だから慌てることはない
今から１０分で元に戻すから一つだけ許可してもらいたいことがある
君の携帯になりすましても構わないか？
大丈夫だ、私は情報漏洩など興味はないんでね、その辺は秘密厳守だ
終わった後は完全に元通りにすると約束する
Ｈａｃｋｅｒ☆Ｊ』

以下のメールを依頼者のレニィ宛に送り、ものの５秒で返事が返ってきた。
”ＯＫ”だと・・・。

「ポートスキャンで原因を突き止めよう、ロヴェン」
「あぁ」

ポートスキャンとはネットワークを通じてサーバに連続してアクセスし、保安上の弱点（セキュリティホール）を探す行為のことをいい、
つまり弱点探しの手段に過ぎない。
ルレルトたちが原因を突き止めるのによく使う手段だ。

この手段で大抵のことは解決にたどり着ける。
これが１０分で解決できる鍵なのだ。

「なるほど・・・これはやっかいになってきたなロヴェン」
「恐らく、推測してレニィの友人だろ・・・こんなに大量のメールを送っているのは」

原因がみるみるうちに判明した。
ルレルトたちは依頼者レニィの携帯が使えない原因を突き止めてしまう、およそ5分で。
大量のメールを送っているのはレニィの友人。
名前までは特定できないが、原因は特定できた。
悲しき加害者の誕生の瞬間でもある。

「こいつに警告メールでも送るか・・・」
ルレルトが少し笑みを浮かべながら言った。
「そうだな」
隣にいたロヴェンが頷く。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第2話：～Ｔｈｅ　Ｓｅｃｒｅｔ～（後書き）

ここまで読んでくださり有難うございます。
まだまだ至らない点が多くありますが、
精進していくよう頑張っていきます。

第3話：～The Surprise Attack（奇襲）～

「こいつに警告のメール送ろうか？」
隣にいるロヴェンに一声かける。
「そうだな」
ロヴェンが静かに頷いた。

■■■．■■■@■■■．■■■■
このＰＣ使用者へ宣戦布告を行う。

初めまして、私の名はまぁ知っているだろうから名乗らない。
名乗った後にはこのＰＣは使えなくなるからね、必要ない。
さて、どうして僕が君にメール送ってるか分かってるよね？
証拠はこちらでごっそり頂いた。

この写真に見覚えがあるだろう？
ないとは言わせない。

今、自首したら、ＰＣの使用不可まではしない。
さぁ、あと2分以内に返事をよこしてもらおう。

困ってるやつの強い味方
人はみなこう呼ぶ・・・ハッカー☆Ｊ　より

依頼者レニィのとある友人にこのようなメールを送った。
このメールを見たレニィの友人ミセルの顔は平然としていた。
まるで嫌がらせを日常茶飯事のようにしていた冷たい裏の顔。

＊＊＊

暗く、蝋燭が明かりでともされている研究室。
「いい獲物が釣れたわ、ハッカー☆Ｊ」
彼女はそういい、自分の服のポケットからイヤホンを取り出し、
ＰＣのシャットダウンがカウントされていく。
「ついに作戦決行の時がきたわね」
そういうと同時に彼女のノートＰＣは強制ロックがかかり、ＰＣが
全く使えなくなっていた。

「ハッカー☆Ｊが本当に釣れた！！　これでお前は終わりだ！！！」
ミセルの隣でアシュラス。低い笑い声が彼の部屋中に容赦なくこだ
まする。
この男もルレルトと同じハッカーだが、彼には裏の顔がある。王国
の知られざる極秘地下組織コードネームＪａｖａと呼ばれる男だ。
噂によると極秘地下組織は、王国が一部のアンチハッカーが組織し、
ハッカーを撲滅するために裏で活動している。
元々、この集団はみなハッカーだった。
だが、ある日を境に自分たちはハッカー以上の知識を持つのに、
世間は自分たちをハッカーとしか呼んでもらえず、王国に極秘に自
分たちの存在を
アピールし、この集団が誕生した。
一般国民に知られることなく極秘に活動し、これまで名をつらねた
ハッカーたちが
幾人も処罰されてきている。
当然、本人も知らないうちに活動しているのだから気がついたら、
牢獄に入るケースが
ほとんど。

「こちらコードネームＪａｖａ。これより作戦を開始します。　覚
悟しろＪ！！」

自分のＰＣに向かって、人差し指を出し、かっこよく決めポーズをするアシュラス。
その隣には彼の後輩とも言えるコードネームＶＢがあきれ顔で様子を伺っていた。
「こちらコードネームＶＢ　。了解！　ぁ、関係ないけどさ先輩、組織の名称まだ決まらないんですか？」

そう、この地下組織の名称。
結成されてまもないのだが、未だに正式名称が決まらず誰も知らない状態になっている。
それに対し、コードネームＪａｖａのアシュラスは、こう続ける。

「この組織の名称？　あぁ、それなら“名称未定”だ！　それがうちの組織名」
思わずふざけているのかこの名前はといいたいくらいに完全にそのままだ。
分からないから名称未定・・・。決まらないから名称未定。
コードネームＶＢであるラルツはお腹を押さえ、完全に吹き出していた。
ラルツは、アシュラスの後輩で、アシュラスにとっては頼もしい部下だ。
「先輩、そのまますぎるじゃないですか！　考えましょうよ・・・ぶはははははは」
「上の意見だ、オレがどうこう言える立場じゃない。　ＶＢ、奇襲をかけるぞ！」
「はい、先輩」

＊＊＊

「さて、相手のＰＣを使用不可にしたことだし、そろそろ寝ようか

ロヴェン」
あっさり余裕の笑みをこぼしながらルレルトが言う。
「今回もだけど結構あっさりしてたな」
3杯目のコーヒーを静かに飲みながらロヴェンが言う。
仕事も終わったし、彼らは自分のＰＣの電源を消し、ベッドでくつろいでいた。
””「ロヴェン、オレ明日の英語の授業寝るからノートよろしく」
布団で寝転がっているルレルトがロヴェンに言った。
「はいはい、じゃ、オレその次のプログラミングの授業寝るから頼む」
ルレルトの隣のベッドで同じくくつろいでいるロヴェンが言う。
「了解、お休み」
「お休み」
2人はいびきをかき始め、完全に夢の世界へいってしまった。

＊＊＊
丁度ルレルトとロヴェンが寝静まっている頃・・・。
「これで第一段階突破、ＶＢどうだ？そっちは？」
「問題ありません、Ｊａｖａ先輩」

”名称未定”の奴らも動き始めていた。
勿論、誰にも知られず・・・知られず・・・。

Ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・

第3話：～The Surprise Attack（奇襲）～（後書き）

ここまで読んでくださり有り難うございました。
ここでは、初めて敵側の正体が分かります。
敵側、株式会社名称未定について詳細を載せます。
長いあとがきになりますが、了承願います。

Ｊａｖａ「よぉ～く聞け、この研究施設に入ってから3年経つコードネームＶＢ！」
ＶＢ「はい、先輩。　でもいきなりＪａｖａとかＶＢとかコードネームで呼ばれるとみんな分からないと思うのですが？」
Ｊａｖａ「うむ、そうだな。まずは自己紹介からだ。」
ＶＢ「はい、先輩！」

Ｃｏｄｅ－ＩＤ：ＪＡＶＡ
人名：アシュラス
性別：男
年齢：２９歳（オレ激しく独身ｗ彼女募集中～♪）
コードネーム：Ｊａｖａ
アンチハッカー歴：９年

（※アンチハッカー歴は、名称未定に入ってからの年数です）

ＶＢ「先輩、すいません、自己紹介用のファイル間違えました（笑」
Ｊａｖａ「ラルツ、いや今はＶＢか・・・んなファイルどこから取ってきたんだ？」
ＶＢ「ええと・・・あはは・・・どこからでしょう・・・（やば、

年齢の（）以降消すの忘れてた））」
Ｊａｖａ「オレ激しく独身ｗ彼女募集中～♪なんでよろｓ（ｒｙ
　　ＶＢ、あとでプログラム１００本組んでもらおうか、３０分以内に（笑）」
ＶＢ「ひぃぃぃぃ・・・ごめんなざい・・・」
Ｊａｖａ「じゃ、おまえの自己紹介ファイルも少しいじられせてもらうぞ！！」

Ｃｏｄｅ－ＩＤ：Ｖｉｓｕａｌ　Ｂａｓｉｃ（略してＶＢ）
人名：ラルツ
性別：男
年齢：２８歳（今キャワイイＣ＋＋に恋愛中～♪
コードネーム：ＶＢ
アンチハッカー歴：３年

Ｊａｖａ「かわいそうに、人間じゃなくプログラムのＣ＋＋が恋人なんて、なんと哀れな・・・
　　そんなに夢中になりすぎるなんて・・・あぁ・・・なんてオレは・・・」
ＶＢ「先輩、わざとらしいです　Ｃ＋＋は、マドカさんですよ、ほら僕と同期の・・・（ぁ」
Ｊａｖａ「あいつか、おまえのカ　ノ　ジョ　は
　　なぁ、ＶＢ、今旬な♀はいないのか？♀は？」
ＶＢ「先輩、怪しいからヤメテください、それよりもっとこう組織のことについて説明しましょうよ」
Ｊａｖａ「うむそうだな、えぇ、取り乱してすまない、では組織から説明しよう」

”名称未定”
正式には”株式会社名称未定”。

自分たちはハッカーより優れた知識を持っているのに世間は認めてくれないから
会社設立。
主な業務はハッカーの撲滅。
今のターゲットは、名の知れたＴＶにも謎の仮面男として紹介されている
ハッカー☆Ｊの確保。
自分たちはハッカーじゃないそれを超えるもの、別の意味でのアンチハッカーの
考え方を持つ。
この会社への入社試験は行わない。その代わりにアンチハッカー思想を持つ超優れた
逸材をスカウトして人材を確保している。
株の売買は実際行っているが、研究員の中でそれを知っているのはごくわずかである。

ＶＢ「ぇ　うち株売ってるんですか？　聞いたことな～い」
Ｊａｖａ「ほ～ら、ちゃんと株の売買もやってるんだぞ、うちは～」
ＶＢ「す・・・すごい・・・裏組織なのに結構儲かってる！！
　ぁ～そういえばここ入るときにテストの代わりに・・・さいｍ（ｒｙ」
Ｊａｖａ「お～っとおしゃべりすぎるのもよくないぞ、ＶＢくん
　今のは何でもない、気にしないでくれ」

しばらくお待ちください。

ＶＢ「そういえばここ、本名じゃなくてコードネームでお互いのことを呼んでるんですよね？」
Ｊａｖａ「うむ、そうだ。上がそっちの方が格好いいかららしいぞ

！」
ＶＢ「え？たったそれだけですか？」
Ｊａｖａ「うん、それだけだ。　上が決めたことが絶対だからねぇ～。」
ＶＢ「マジですか！！」
Ｊａｖａ「うん、マジだ。　この前小耳に挟んでそういっていたぞ」

ＶＢ「なるほどよく分かりました」
Ｊａｖａ「うん、組織の説明はこれくらいあれば十分だ」
ＶＢ「そうですね、ぁ、そろそろ寝る時間ですよ、先輩」
Ｊａｖａ「おぉ～睡眠時間キタ　──ヽ（、ω、）ノ　──！！」
Ｊａｖａ＆ＶＢ「お休みなさい～（＊。∀。）っ［・＋：。★Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ★・＋：。］」

補足説明　完了・・・（一応

ＯＴＬ

第3話＋α：株式会社名称未定について（前書き）

このページは第3章で登場しました名称未定の説明部分になります。あったほうがいいかなと思い付け加えました。第４話はもう少しお待ちください。

第3話＋α：株式会社名称未定について

Ｊａｖａ「よぉ～く聞け、この研究施設に入ってから3年経つコードネームＶＢ！」
ＶＢ「はい、先輩。　でもいきなりＪａｖａとかＶＢとかコードネームで呼ばれるとみんな分からないと思うのですが？」
Ｊａｖａ「うむ、そうだな。まずは自己紹介からだ。」
ＶＢ「はい、先輩！」

Ｃｏｄｅ－ＩＤ：ＪＡＶＡ
人名：アシュラス
性別：男
年齢：２９歳（オレ激しく独身ｗ彼女募集中～♪）
コードネーム：Ｊａｖａ
アンチハッカー歴：９年

（※アンチハッカー歴は、名称未定に入ってからの年数です）

ＶＢ「先輩、すいません、自己紹介用のファイル間違えました（笑」
Ｊａｖａ「ラルツ、いや今はＶＢか・・・んなファイルどこから取ってきたんだ？」
ＶＢ「ええと・・・あはは・・・どこからでしょう・・・（やば、年齢の（）以降消すの忘れてた））」
Ｊａｖａ「オレ激しく独身ｗ彼女募集中～♪なんでよろｓ（ｒｙ
　　ＶＢ、あとでプログラム１００本組んでもらおうか、３０分以内に（笑」
ＶＢ「ひぃぃぃぃ・・・ごめんなざい・・・」
Ｊａｖａ「じゃ、おまえの自己紹介ファイルも少しいじられせても

らうぞ！！」

Ｃｏｄｅ－ＩＤ：Ｖｉｓｕａｌ　Ｂａｓｉｃ（略してＶＢ）
人名：ラルツ
性別：男
年齢：２８歳（今キャワイイＣ＋＋に恋愛中～♪
コードネーム：ＶＢ
アンチハッカー歴：３年

Ｊａｖａ「かわいそうに、人間じゃなくプログラムのＣ＋＋が恋人なんて、なんと哀れな・・・
　そんなに夢中になりすぎるなんて・・・あぁ・・・なんてオレは・・・」
ＶＢ「先輩、わざとらしいです　Ｃ＋＋は、マドカさんですよ、ほら僕と同期の・・・（ぁ」
Ｊａｖａ「あいつか、おまえのカ　ノ　ジョ　は
　なぁ、ＶＢ、今旬な♀はいないのか？♀は？」
ＶＢ「先輩、怪しいからヤメテください、それよりもっとこう組織のことについて説明しましょうよ」
Ｊａｖａ「うむそうだな、えぇ、取り乱してすまない、では組織から説明しよう」

”名称未定”
正式には”株式会社名称未定”。
自分たちはハッカーより優れた知識を持っているのに世間は認めてくれないから
会社設立。
主な業務はハッカーの撲滅。
今のターゲットは、名の知れたＴＶにも謎の仮面男として紹介されている

ハッカー☆Ｊの確保。
自分たちはハッカーじゃないそれを超えるもの、別の意味でのアンチハッカーの
考え方を持つ。
この会社への入社試験は行わない。その代わりにアンチハッカー思想を持つ超優れた
逸材をスカウトして人材を確保している。
株の売買は実際行っているが、研究員の中でそれを知っているのはごくわずかである。

ＶＢ「ぇ　うち株売ってるんですか？　聞いたことな～い」
Ｊａｖａ「ほ～ら、ちゃんと株の売買もやってるんだぞ、うちは～」
ＶＢ「す・・・すごい・・・裏組織なのに結構儲かってる！！
　ぁ～そういえばここ入るときにテストの代わりに・・・さいｍ（ｒｙ」
Ｊａｖａ「お～っとおしゃべりすぎるのもよくないぞ、ＶＢくん
　今のは何でもない、気にしないでくれ」

しばらくお待ちください。

ＶＢ「そういえばここ、本名じゃなくてコードネームでお互いのことを呼んでるんですよね？」
Ｊａｖａ「うむ、そうだ。上がそっちの方が格好いいかららしいぞ！」
ＶＢ「ぇ？たったそれだけですか？」
Ｊａｖａ「うん、それだけだ。　上が決めたことが絶対だからねぇ～。」
ＶＢ「マジですか！！」
Ｊａｖａ「うん、マジだ。　この前小耳に挟んでそういっていたぞ」

ＶＢ「なるほどよく分かりました」
Ｊａｖａ「うん、組織の説明はこれくらいあれば十分だ」
ＶＢ「そうですね、ぁ、そろそろ寝る時間ですよ、先輩」
Ｊａｖａ「おぉ～睡眠時間キタ　└┘ヽ（、ω、）ノ　└┘！
！」
Ｊａｖａ＆ＶＢ「お休みなさい～（＊゜∀゜）っ［゜＋：。★Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ★゜＋：。］」

補足説明　完了・・・（一応

ＯＴＬ

第3話＋α：株式会社名称未定について（後書き）

株式会社名称未定のイメージです。
こんな感じです（笑
＋αにもかかわらず、読んでくださって有難うございます。
第４話、お楽しみにして下さい。

第４話：～Ｔｈｅ　Ｃｒｉｓｉｓ～Ｉ（前書き）

第３話で依頼者レニィの嫌がらせをしていた犯人が分かりました。
株式会社名称未定・・・お互いのことをプログラミングのコードで
呼び合う不思議な組織。
ハッカー☆Ｊを付けねらう理由とは？

第４話：～Ｔｈｅ　Ｃｒｉｓｉｓ～Ｉ

株式会社名称未定。それがＶＢとＪａｖａ先輩が所属する組織だ。
ラルース地方北西部王国都心セルリミア王城の地下１０００メートルに組織を構え、活動している。
活動時間帯は、大抵深夜０時～６時くらいまでで、どこからどうみても夜行性人間ばかりが集まる。
組織に属する人間は皆、本名ではなく、コードネームでやり取りをしていて、全員が何らかのプログラム名で呼ばれている。

「これで第一段階突破！ＶＢどうだ、そっちは？」
この声の主はコードネームＪａｖａと呼ばれる男の声だ。
髪の色は薄水色でおかっぱ頭をしており、顔は研究熱心なせいかやせ細っているが、目だけがばっちり開いている。
服装は、ラフなＴシャツ、そのＴシャツの上に白衣を着て、ジーパンを履いている見た目好青年だ。
Ｊａｖａは、漸く部下を持ち、指導に張り切っていた。
張り切りすぎて、自分の思考、コーディングのパターンを部下に押し付ける時もあった。
そしてその部下が、Ｊａｖａの隣にいるＶＢだ。
「問題ありません、Ｊａｖａ先輩」
Ｊａｖａの問いかけに対して、部下であるＶＢが深夜２時も関わらず、はきはきとした威勢のいい返事で返した。
ＶＢは、この組織に入って３年が経つのだが、真面目な青年で、服装はカッターシャツにネクタイを締め、髪型も短髪で整えられ、誰が見ても清潔感溢れる好青年だ。

―第一段階。
ＪａｖａとＶＢの目標のひとつでもあるハッカー☆Ｊと名乗る得体

の知れない男の陥れる作戦の第一段階だ。
ハッカー☆Ｊという名がこの組織にも広まったのはごく１ヶ月前だ。
組織の連絡掲示板のＷｅｂニュースを見た記事にこう見出しがついている。
”悪いことをしちゃうと、ハッカー☆Ｊに捕まるぞ！！”
更に記事を読み進めると、写真と一緒に、ＰＣのクラッシュ映像の静止画が目に留まった。
ハッカー☆Ｊは、悪いことをした奴全てのＰＣをクラッシュするという噂は聞いたことがあるが、噂は真実だとＪａｖａとＶＢはつきつけられた。
例えば、誹謗中傷、ネット犯罪予告から個人情報の漏洩、学校のいじめなどが該当し、それを行った被疑者はもれなくハッカー☆Ｊの餌食となり、
ＰＣを二度と使えない状況にさせられる。

ラルース王国では、ＰＣは生活必需品と考えられ、あまり買い換えを推奨しないことからＰＣ１台３０万円ととてもじゃないが、一般市民には手が届かない
価格設定となっている。
一般市民の平均給与がおよそ８万であり、どうみてもすぐには買い替えはできない。
これがクラッシュということは、ここでの生活が出来ないことを意味する。

ＪａｖａとＶＢは、この生意気ないけ好かないハッカー☆Ｊを陥れろとこの日に彼らの上層部から命じられた。
期限は１ヶ月。

彼らの死闘がここから始まった。

まずは、どう陥れるかだ。
陥れるにも多種多様な方法があり、２週間ほどＪａｖａとＶＢは試行錯誤を繰り返しながらう～～～んとうなりながら職務を遂行した。

３週目で、どうしても思いつかないので、オウム返しという方法を取る。
このオウム返しは、１週目のとある日に、ＶＢが上司であるＪａｖａに提案したが、そんなんでは見抜かれると察知し、即却下を出した案だ。
Ｊａｖａはもう一度この案を検討しなおし、隙をつけば案外たやすく成功すると考えを改めなおす。
よって最終的にはオウム返し先方が第一段階となった。
つまり、ハッカー☆Ｊの情報を採取してから、証拠隠滅の為に、ハッカー☆ＪのＰＣをクラッシュさせるというものだ。

まず情報収集するにはハッカー☆Ｊ側が何らかのアクションを起こさなければならず、何をするか考えた。
２週目の終わりから３週目の始めにかけて、ＶＢとＪａｖａは更に考える。
そして３週目の２日目が経つころのことだった。

「Ｊａｖａ先輩、僕今日、昼間は情報収集に当たってたのですが、どうやらハッカー☆Ｊは夜中に監視して、緊急のものを優先させるとのことです」
「でかしたぞ、ＶＢ・・・あいつを釣ろう！！緊急の事件をこちらから仕掛ける」
Ｊａｖａは、フフフと高笑いをし、獲物を捕らえたような顔でにやりとした。

「コードネームパイソン！！」
Ｊａｖａは、パイソンと呼ばれる本名はミセルである同僚の名を呼んだ。
すると即座に扉が開き、髪はロング。
クリーム色でパーマがあたり、薄緑色の瞳を持つ身長は１６０ｃｍくらいの女性がＪａｖａとＶＢがいるミーティングルームに入ってきた。
「あら、例の作戦であたしが囮役に？」
パイソンは眉をひそめ、Ｊａｖａをにらみつける。
「ＰＣは研究室からボロイＰＣを使え！上層部が、始末するＰＣだからいくら壊れたってかまわないそうだよ」
Ｊａｖａはにらみつけられても冷静に説明を続けた。
「先輩、問題は被害者ですよね？どうするんです？」
ＶＢはＪａｖａに疑問点を述べたが、パイソンが高飛車な笑いでこう告げる。
「フフフ、その点は心配しなくてもいいわよ、任せてもらってもいいわ」
ＶＢは一体誰なんだろうと教えてくれと目で合図してみたが、パイソンはその合図に気づきながらも何も言わなかった。
「パイソン、全て君に託すよ」
Ｊａｖａは、被害者がおおよその見当がついていた。
何も言わずにパイソンを見送る。
「了解」
パイソンは右手を上げ、手を振り、部屋を後にした。

「ＶＢ被害者なら、作戦が始まったら分かるよ。裏切り者にはこういう末路がお似合いさ」
Ｊａｖａは意味深なことをＶＢに告げ、ＶＢはこの組織に裏切り者がいることしか分からなかった。
ＶＢは、これ以上詮索しては訳が分からなくなると思い、詮索を止

めて、作戦決行の日まで考えないことにする。

そして、作戦詰めの彼らは1週間の休息の後、作戦を決行に移した。

第４話：～Ｔｈｅ　Ｃｒｉｓｉｓ～Ｉ（後書き）

最後まで読んでくださって有難うございます。
この第４話は２部構成になっております。
続編がありますので、もう暫くお待ちください。

第４話：～Ｔｈｅ　Ｃｒｉｓｉｓ～ＩＩ（前書き）

前回第４話のＩでは、
依頼者レニィの携帯をパンクしたのはなんと名称未定！
さてこれからどう動くのか！！

第４話：～Ｔｈｅ　Ｃｒｉｓｉｓ～ＩＩ

－１週間後
株式会社名称未定研究室４１２３－５号室。
男が２人、女が１人研究室にいる。
研修室の作りは質素で、３台の机と椅子、入り乱れるように文字が書かれてあるホワイトボードと
ちょっと電源部分に１ｃｍの穴が開いているノートＰＣが置かれてある。
ノートＰＣにはＵＳＢフラッシュメモリ８ＧＢが差し込まれている。
辺りには電気が通っていないので、蝋燭で部屋を照らしていた。

「ところで、パイソン。　被害者とはどう接触したのだ？」
見た目よりシワが多いせいか老けがち見られるＪａｖａが隣にいる１人の女であり、Ｊａｖａの同僚でもあるパイソンに問う。
「そんなの簡単よ。　チャットよ。」
何か得たような笑みを浮かべ、パイソンはさらに説明を続けた。
「チャットは相手の顔が見えない。　だから相手の話聞くだけで同情を得るように振る舞えば、のってくるわよ。
　私、こう見えてここに入る前は、チャットの長所と短所を専門に研究してたのよ。　これくらい当然」
パイソン、本名ミセルは、ここ、株式会社名称未定に入る前は、どこぞの組織でチャットを研究していた。
チャットというのはもう何も言わなくても分かると思うが念のため。
チャットは、インターネットを介してリアルタイムで相手と話すことができる技術だ。
キーボードで相手と雑談したり、まぁ、会社の愚痴をこぼしたり、

時にはいい話をしたりする。
「私は被害者を知っている、けどあの子は私のことを一つも知らない・・・・・・フフフ」
パイソンが被害者に自分の正体を１００％知られていないことを確信し、笑みを浮かべた。
チャットの恐怖の一部である。
相手の顔が見えないのもそうではあるが、この”振り”が誰にでも出来てしまう。
知ってる人のように振る舞ったり、パイソンのように逆もしかり。
ここ、ラルース王国でもこのチャットの問題は取り締まれないくらい様々な事件が起きている。
知っている相手になりすまされたことに気がつかず、金品を貸して帰ってこなかったり、
オークションをしている人になりすまし、チャットで親しいのを装い、お金だけ取られ、商品が全然届かないといったことである。
チャットは、全国どこからでもリアルタイムであれば会話できる便利なツールの反面、
犯罪の道具としてもなりやすいのだ。

パイソンはゆっくり口元を動かし、１人の女性の名を口ずさむ。
「コードネームＶＣ＋＋・・・・・・レニィよ。　それが今回の被害者・・・・・・」
ＶＢはこいつ誰だよ？と腕組みをして？マークを浮かべていた。
一方、Ｊａｖａは納得した顔でなるほどと頷いた。
「ＶＣ＋＋あの小賢しい裏切り者か・・・・・・あいつだったらハッカー☆Ｊにいち早く問題解決を依頼するだろう」
「すいません、Ｊａｖａ先輩、パイソン先輩！！　あのＶＣ＋＋のレニィって誰なんですか？」
ＶＢはこのまま勝手に話が進められても自分には訳が分からないので、恐る恐る質問する。

「そうか、お前はレニィと入れ違いに入ってきたから分からなくても当然だな、すまん」
「そういえばそうだったかしら」
ＶＢにも分かるようＪａｖａとパイソンの説明が始まった。

コードネームＶＣ＋＋　本名レニィ＝アイソール
彼女は４年前、組織の壊滅の危機に陥れ、組織の内部の情報を公開した裏切り者。
名称未定では、組織内の情報を外に流す行為そのものが組織に対する冒涜とし、裏切り者扱いされることになっている。
Ｊａｖａとパイソンが直接聞いた話によると、
ＶＣ＋＋は、外部に漏らしてはいけない重要度Ｓランクの秘密をもらしたらしい。
その見返りに、組織を辞めさせられ、辞めたショックで組織にいたときの記憶が全くないらしいのだ。

「ＶＣ＋＋も特化した技術者だから、携帯クラッシュさせといたら、ハッカー☆Ｊにでも相談するんじゃないかしら」
「流石に携帯はちょっとやりすぎじゃないのか？」
「・・・・・・ですよね、一応生活必需品ですし」

ブルブルブルブル・・・・・・・・。
ＪａｖａとＶＢの話に水を差すようにパイソンの携帯の振動がなった。

「これ以上話したら時間がないわよ・・・・・・・！！　ハッカー☆Ｊがつれたみたい」

―パイソンの作戦・・・・・・
レニィの携帯をクラッシュさせると同時に、レニィの通話履歴、メ

ールの送受信履歴を不正に取得し、ハッカー☆Ｊ宛のメールアドレスが
履歴に残れば、自分の携帯にアラームを発生させ、先ほどの振動音が鳴るような仕組みをしかけたのだ。

「ハッカー☆Ｊが釣れた！！　これでお前は終わりだ！！！」
Ｊａｖａは、肘を高く上げ、そのままガッツポーズをした。
と、同時にパイソンの技術力に驚く。
まさか、チャットごときの研究者が、ここまで出来るようになるとは、人間努力すれば何でもできるようになるんだなと。
パイソンはあまりプログラムは得意な方じゃなかったが、我々会社の考え方には忠実でとても真面目な女性だ。
真面目な性格が買われ、名称未定に入ってきた。

ＰＣに差し込んでいる８ＧＢのフラッシュメモリが点滅をし始めた。

このフラッシュメモリには特殊な仕掛けが組み込まれ、ハッカー☆Ｊの組んでいるプログラムがここに入れば、
成功した印として、点滅を始めるのだ。
ＰＣがクラッシュするほどのプログラムは、８ＧＢのフラッシュメモリで十分入るサイズだから問題ない。
なんと２ＧＢくらいでクラッシュのコードはかけるので、十分に余りすぎている。
実は８ＧＢにしたのは訳があって、Ｊａｖａがハッカー☆Ｊのコードをこのほかにも保存したいからである。
保存したコードは極秘で組織内に公表すれば、出世も遠い話ではない。
それほど、今の組織はハッカー☆Ｊの話題で持ちきりなのだ。

プシュン・・・・・・

ログ採取完了と同時に、オンボロＰＣの全電源がＯＦＦになり、使えなくなってしまった。
どうやらこれが、ハッカー☆ＪのＰＣクラッシュらしい。演出家なのか？それともただの変わり者か？
オシャレにＰＣから涼しいミストが流れ、３人の体感温度を一気に２度くらい下げる。
ミストが流れ出たと思ったら、オンボロＰＣにポップアップで一行メッセージが出ていた。
“ー電源ＯＦＦ緊急ポップアップメッセージー
お掃除完了！　涼んでくれた？　夏は暑いからミストはサービスだよ☆　ｂｙ　Ｈａｃｋｅｒ☆Ｊ”

それから3人はオンボロＰＣには見向きもせず、ＶＢの業務用ＰＣでフラッシュメモリでログが入ってるかチェックを行った。
「セーフです！！　コードは無事この中に全部入っています！！」
ＶＢは、一オクターブ高い声で、ログ採取の成功を告げた。
「やったぞ！！　これをあいつに送れば、あいつのＰＣもお陀仏だ！！」
3人は、それぞれ手を出しタッチをして成功を喜んだ。
「ハッカー☆ＪってＰＣしかクラッシュさせることは出来ないのね、これついてるわよ」

オウム返し、作戦完了。
「さらば、ハッカー☆Ｊ」
Ｊａｖａ、ＶＢ、パイソンによる連携により、無事コードを採取、そしてメールに添付してＰＣをクラッシュさせるようにプログラムを組み直した。

ポチッ
Ｊａｖａは、メールの送信ボタンを押した。

運命の闘いが今始まる。

第４話：～Ｔｈｅ　Ｃｒｉｓｉｓ～ＩＩ（後書き）

ここまで読んでくださり、有難うございました。
第４章はこれで完了です。
お疲れ様でした。

Ｈａｃｋｅｒ☆Ｊ、ついにランキング参加しましたので、
小説の目次まで戻って面白かったポチっと押してやってください。
よろしくお願いします。
では、第５話で会いましょう！！

第5話：～Ｔｈｅ　Ｃｏｎｔａｃｔ～Ｉ（前書き）

第４話では、ルレルトを敵にしている株式会社名称未定の動きをお伝えしました。
結構、狙われている主人公ｗｗｗ
果たして主人公のＰＣは無事なのか！？
続きは←です！！

第5話：～The Contact～I

「おい、起きろ！！」
ここは、大学の寮。
周りには、ベッド、生活必需品のＰＣが3台くらい、明かりのシャンデリア、そして時を刻む時計。
時計の針が午前6時半くらいをさしていた。
この日は、大学の授業が1限目から控えており、通学には１０分で済むのだが、
彼らには、やることがあるのだ。
毎日日課にしているので、大抵この時間帯に2人とも目が覚めるはずなのではあるが、
約1名眠りこけている。

「ルレルト、いつものあれの時間だ！！　頼むから起きてくれ！！」
ルレルトのルームメイトでもあり、竹馬の友でもあるロヴェンが、ルレルトの体を揺する。
「むにゃ・・・・・・ぁ、待ってよぉ～モルフォ～・・・・・・」
返ってきたのは寝言だけで、全く起きる様子がない。
蝶の夢でも見ているのだろうか？モルフォって蝶だよな？あの・・・・・。
「ぁ、仕方ない、またあれをしないと起きてくれないのか・・・・・・・これでもう１８回目・・・・・・」
ロヴェンは、くるりと後ろを振り向き、そのまままっすぐ歩く。
そして、何やら仮面というよりか机に置きっぱなしのマスクとルレルトの白衣を取り出し、
両方とも装着。
そしてロヴェンのゴホンという声に合わせた。
「ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ！！　ルレルトくん、起きる時間だよ？　どう

だい？　自分の声で起こされる感触は？」
ルレルト、いやどちらかというとハッカー☆Ｊよりの完璧な美声で
ルレルトに呼びかけた。
それと同時に今まで微動だにしなかったルレルトの体が自然と起き
上がり、返事をする。
「・・・・・・・最悪」
だったら頼むからなるべく自分で朝くらい起きてくれと願うロヴェ
ンが突っ立ている。
ルレルトは昔からハッカー☆Ｊモードの自分の声を聴くとどんなに
眠かろうが、疲れていようがすぐに体力を回復するという
あるまじき習性を持ち、
ロヴェンは、声を狂いもなく完璧に真似る習性を持つ。
ロヴェンのこの習性のおかげで、ルレルトが眠っていて急に教授か
ら質問が振られていても、的確に答えを返し、
何かと助かっている。
時に腹話術のようにもロヴェンが振舞うので、実際本人がしゃべっ
ているのかそうではないのか、
とてもじゃないが周囲からは区別がつけにくい。
それほどロヴェンは達者だ。
「いつものＰＣのメンテナンスとチェックだ」
ロヴェンがまだ起きたばかりのルレルトにそういい、２人は３台の
ＰＣ順番にチェックしていった。
チェックといっても、きちんと電源が入るかどうか、ＰＣがウイル
スにやられてないかチェックする。
「１台目ＯＫ、２台目ＯＫ。　ルレルト残り１台は？」
「面白いのがきたよ、被害は最小限ですんでるからどうでもいいけ
ど・・・・・・」
どうやら３台目のＰＣに少々トラブルがあったようだ。
３台目の電源をつけたと同時に、ポップアップメッセージが表示さ
れていた。

“不審なコード付きプログラムを受信しました。
プログラムを解析した結果、以前にこのＰＣに保存されていたテキストファイルです。
実行は危険なので、自動で削除を行いました
尚、相手のアドレスもついでに受信したのでこちらを参照してください”
「昨日、レニィの友人宛にひそかに送ったやつだよな？　それって・・・・・・」
落ち着いた顔で、ロヴェンがルレルトに確認を取る。
「そうだ、確かにこれ送ったんだが、また同じのが返ってくるとなると裏だなこいつは」
ルレルトが言う裏とは、地下組織アンチハッカー思考の株式会社名称未定のことだ。
ルレルトは、ハッカー☆Ｊをやる前から彼らの存在は知っていた。
ネットで情報を集め、彼らの思想、行動パターン、プログラミングコードの癖すべてルレルトにはお見通しだった。
「ちょっと参照先のアドレス見たほうがいいぞ」
そういって、ロヴェンはマウスを持ち、参照先アドレスをクリックした。
またポップアップメッセージが現れ、そのメッセージにルレルトは予想通りと確信した。
“アドレスタイプ：ＡｓｓｏｉａｔｅｓＭ　名称：株式会社名称未定　ＰＣ－マシンＩＤ：Ｍ１２４３－ｓ２３－ＶＢ”
「間抜けすぎるな・・・・・・名称未定って・・・・・・ＰＣ－マシンＩＤを公開するなんて信じられない」
ロヴェンの言うとおり、この世界の企業は、普通ＰＣ－マシンＩＤまでは公開はしない。
ためしに、情報を収集しようとしても名称までしか出てこない。
ＰＣ－マシンＩＤまで公開してしまうと、個人まで特定できてしまうからだ。

つまりこの企業または学校所属の誰々のように分かってしまう。
株式会社名称未定も一応はＰＣの専門家集団が集まる組織だ。
なのでＰＣ－マシンＩＤを公開したらどうなるかも彼らにも分かっているはず。
何でこんな初歩的なミスをするのかルレルトとロヴェンには、理解不能だった。
「さて、そろそろ授業に行くかな？　あんまり今のことは学校では言わないほうがいいわな」
ルレルトは、ある程度の予測をしていた。
もし、他の人間に、今のことを話せば、もしかすると大学に組織の人間が紛れ込み、ひそかに情報収集されているのではないかと。
「そのほうがいいな」
ロヴェンもルレルトと同じことを考えての返事だった。
今起きたことは何もなかったかのように普段どおり振舞ったほうがいいと。
こうして、２人は学校へ向かった。
そのころ学校では不吉な噂が流れているとも知らずに・・・・・。

第５話：～Ｔｈｅ　Ｃｏｎｔａｃｔ～Ｉ（後書き）

ここまで読んでくださり有り難うございます☆
第５章は今のところ構成は未定です。
続けて第５章のＩＩをお楽しみください。
それではノ

第５話：～Ｔｈｅ　Ｃｏｎｔａｃｔ～ＩＩ（前書き）

前回第５話のＩで、主人公のＰＣが危機を迎えますが、
さすがはハッカーｗｗｗ
事前の対策をきちんと行い、ＰＣ壊れずにすみました。
とうとう学校へ向かうのですが、株式会社名称未定が
新たな動きをしていました！！
その動きとは！！

第5話：～Ｔｈｅ　Ｃｏｎｔａｃｔ～ＩＩ

ルレルトたちは学校からおよそ１ｋｍ手前の大きな坂にさしかかっていた。
そこでロヴェンがふととまる。
「待て」
ロヴェンの右手がルレルトの肩を押さえ、ルレルトが歩き出すのを止めた。
「分かってる、もうちょっとで大学から半径１ｋｍ以内に入るんだな・・・・・・めんどくせぇ」
ルレルトも足を止めてその場でフラッシュメモリ８ＧＢを取り出した。
ここラルース王国では、フラッシュメモリを始めノートＰＣ、携帯、ワンセグＴＶ等の家電製品にはＩＰアドレスを付与されている。
ＩＰアドレスは、言わば家の住所みたいなもので、一発でどこどこの家の誰々さんというように身元がばれてしまう。
万が一組織の連中がうろついていたら、ＩＰアドレスで自分が何者かがばれてしまう。
ラルース王国の法律で、研究所施設、学校施設半径１ｋｍ以内はＩＰアドレス探知機の設置が義務付けられている。
もし、悪用するとしたら１ｋｍ以内に身を寄せ、上記家電製品等から、ＩＰアドレスを探知し、裏の組織で悪用される。
ラルース王国のハッカーたちは、学校関連、研究所関連から半径１ｋｍ以内に入る前に身元を隠す準備をしないといけないのだ。
「さて、今回は何にしよう」
ルレルトはその場でしゃがみこみ、左手をあごにつき、考え始めた。
「ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ！！　偽装だから別に何でもいいんじゃないのかな、ルレルトくん？」
隣で突っ立っているロヴェンが得意の腹話術でＨａｃｋｅｒ☆Ｊに

なりきっている。
「よし、今回、ＩＰアドレスはこう偽装しよう」
”Ｎｅｋｏ｜１２３．ｃｈｏｕ｜ｌｏｖｅｌｙ｜４５６．ｓｈｏｃｋｉｎｇ｜ｈｅａｒｔ７８９”
「ぶっｗ　ショッキングハートって、お前誰かに振られたのか？」
ロヴェンはお腹を抱え、吹き出していた。
「ネタだってネタ！それに俺は彼女作る趣味なんてねぇよ」
そのまま表情を変えずにクールに流すルレルト。
こうしてフラッシュメモリ彼らが所有するミニＰＣ、携帯電話等全てに偽装させ、万が一情報が取られても、以下のように表示されて、何も手に入らない仕組みになっている。
”ＩＰアドレスから持ち主を特定できませんでした。
　商品が新品でＩＰアドレスを付与していないか、既に廃棄され所有者の手から離れている可能性があります”
ルレルトとロヴェンは、何も気にすることもなく、普段変わらず雑談を交わしながら、学校へ近づく。
やがて歩いているうちに、学校の校門が見えてきた。

＊＊＊

「こちらＶＢ！！　この前実験でついでに入手したＩＰアドレスと同じアドレスはまだ発見していません！！　以上」
「こちらパイソンよ。　特に異常はないわね」
Ｊａｖａの無線通信機から聞こえてくる部下の声。
偽装してるかまだこの学園内にいないのか。

Ｊａｖａは腕を組み首を右に左にう～んとうなっていた。
Ｊａｖａ、ＶＢ、パイソンは、こないだの鸚鵡返し作戦で、プログラムのコードを分析した結果、Ｈａｃｋｅｒ☆Ｊが大学生で、今自分たちがいる学園に通っているところまでは突き止められた。
だが、肝心の名前を調べたところ、パスワードを解除してもエラーが出て、名前の部分を検索にかけてもダメで、手に入らなかった。
この結果は彼らも少しは予測していたようだ。
相手は何せ、ハッカーであり、コンピュータの精通者。
当然のことながら、公開してはいい情報と、公開してはいけない情報とをきちんと知っている。
なので、名前などこれひとつで全て分かってしまう情報なんて公開しているはずがない。
大学名を公開したところで、大学の生徒は何万といる。
大学名だけで個人を特定するのは大変なことなのだ。
なので、名称未定の彼らは、次の行動に出た。
彼らは、Ｈａｃｋｅｒ☆Ｊが通っていると思われる今いるこの学園に赴く。
偽装チェッカーというＩＰアドレスの偽装を解除して正しいＩＰアドレスを表示させるツールを用いた。
体育館倉庫裏で目を血眼にして、調べている。
実際体育館倉庫裏にいるのはＪａｖａ。
残りのＶＢとパイソンは、二手に分かれて大学の建物内全域を偽装チェッカーの範囲になるよう各自設定していた。
そして３０分毎に倉庫裏にいるＪａｖａと各自連絡を取り合っている。
偽装チェッカーも確かに機能的には高機能に当たるが、ハッカーによっては偽装チェッカーでも見破れないケースもある。
Ｊａｖａは少しばかし自分の気持ちに違和感を持ちながらも、部下からの報告を聞いていた。
そしてまた３０分経とうとしていた。

どうせ、また異常なしの報告だろとそう思っていたら、
ＰＣの監視モニターに、またしゃれたメッセージの表示と同時に音声が流れてくる。

”こちらＶＢだよ～ん☆　実はハッカー☆Ｊを見つけちゃったりしました～♪
　君も苦労が絶えないねぇ～　どこの物好きだ？　ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ！！”

「ＶＢじゃないな、こいつは・・・・・・」
どこの物好きかこっちが知りたいとＰＣの監視モニターに文句を言いつつ、Ｊａｖａは確信した。
それもそのはず。
こんな文章を贈りつけてくる奴は、あいつしかいない。
「ＶＢ、パイソン！！　こちらＪａｖａだ！！　どうやらハッカー☆Ｊが学園に入ったようだ！！　至急サーチしろ！！」
体育館倉庫裏なので、エコーが鳴り響く中、これ以上にない気合の入った声で部下に命令を出した。

＊＊＊

学校の校門に入ったルレルトロヴェンは、近くの掲示板に人がやたらといるのを発見する。
あわてて近づいてみる。
「なになに？　先遣技術調査隊、通称先遣隊のレニィが行方不明・・・・・」
レニィって依頼してきたあのレニィだとルレルトにはすぐ分かった。
「あいつ先遣隊だったんだな」
ロヴェンがいう先遣隊とは、学園で極秘に技術等不正をしていないかチェックする学園の組織に当たる。

構成人数はメンバーのみしか知りえない。
噂によると、先遣隊の設立はある一部の地域だけであり得ないスピードで技術が発展してる原因を探るために設立されたらしい。
技術の進展は実に喜ばしいことだ。この時代が進展するだけ便利になるということだ。
だが、噂の地域は進展のしすぎでその地域に入っただけで別世界を思わせるほどの進展ぶりらしい。
まるで異空間に自分はいるのではという錯覚まで見た人もいるらしいのだ。
この学園は、その原因を調査するために先遣技術調査隊、通称先遣隊を随時派遣している。
その先遣隊が一人でも欠けると、一人の調査範囲が増えてしまう。
先遣隊は、ＰＣのモニターを使い、一人三人分くらいの仕事をこなしている。
それが減ることで、仕事の割り振りが、一人六人分くらいの分量になってしまう。

「この反応は偽装チェッカーだな」
ルレルトのフラッシュメモリ８ＧＢが点滅していることにロヴェンが気づく。
「もうばれちゃったか」
フラッシュメモリを服のポケットから取り出し、点滅しているのを確認した。
「お前、わざとだろ？」
すかさずロヴェンが突っ込む。
「すまん・・・・・さっきから何かもやもやして、いやな予感がするんだ」
ルレルトはどうやらわざと偽装チェッカーに引っかかるようＩＰアドレスを設定していた。
ルレルトは株式会社名称未定と聞いた時点で、何かが引っかかりど

うもすっきりしない。
その何かはうまく説明できない。
「さては、ハッカーの行方不明事件と名称未定が絡んでるってやつか？」
ロヴェンは、前にどこぞのインターネット裏情報掲示板で見たことをそのまま問うてみた。
「お前もあそこの掲示板見てたのか」
ルレルトはそのままうつむき、ため息を漏らす。
その裏情報の掲示板によると、名称未定がハッカーたちを極秘に集め、無理に仕事をさせているという記事だった。
始めは、アンチハッカー組織がハッカー集めて馬鹿馬鹿しいと思ったのだが、
情報を集めるたびに驚愕な記事を目にするようになる。

”名称未定、入社試験にサイコ誘導催眠を行っている？”
”名称未定、入社してから、記憶をなくす人続出”
”名称未定、ハッカーには試験終了後採点加点疑惑！？”

「俺、２番が気になるんだよ・・・」
うつむいたままルレルトがロヴェンに問いかける。
「奇遇だな、俺もだ」

ルレルトとロヴェンは、人をかきわけ掲示板から離れ、授業の休講情報が載っている掲示板に移動した。
幸い、２人とも授業が全て休講だ。
「ちょっといっときますか」
ルレルトが、Ｊマスクを取り出し、装着する。
「あぁ。　名称未定をぶん殴りに・・・・・・」
ロヴェンも、Ｊマスクを取り出し、装着した。
「って、いつの間に？」

うつむいていたルレルトがテンションを回復したようだ。
「お前のソースコードを参照にして、作った」
ロヴェンは笑みを浮かべる。
よほどＪマスクをつけたかったようだ。
ここに茶髪のＪと銀髪のＪが誕生した。
（もし、あの噂が本当ならば・・・・・・）
テンションは回復したけど、やはり何かが引っかかってすっきりしないルレルト。
（記憶をなくす技術・・・・・・どこかで聴いたことあるようなないような・・・・・・）
何故ここまで自分は知っているのか自信が持てないロヴェン
二人は休講掲示板を後にし、歩き出した。

第5話：～Ｔｈｅ　Ｃｏｎｔａｃｔ～ＩＩ（後書き）

ここまで読んでくださり有り難うございます。
次回は第５章ＩＩＩです♪
次回はとうとう、名称未定と主人公が接触します。
乞うご期待！！

それにしても秋ですねぇ～
早く松茸が食いたいです（笑

第５話：～Ｔｈｅ　Ｃｏｎｔａｃｔ～ＩＩＩ（前書き）

前回では、偽装チェッカーの恐怖を味わいました（ぇｗ
今回はロヴェン君のＰＣにご注目してください。
もうありえませんｗｗｗ

第5話：～Ｔｈｅ　Ｃｏｎｔａｃｔ～ＩＩＩ

休講情報の掲示板を後にしたルレルトとロヴェンは、大学のロビーへ移動していた。
二人は、ロビーの椅子に腰をかけ、ルレルトは窓の外を見ていた。
一方ロヴェンは、ＰＣを懐から取り出し、ごそごそしていた。
「ロヴェン、さっきから何してるの？」
周りは学生の行き来が激しい。
勿論、ロビーも例外ではない。
そんなごそごそしているのは誰の目を見ても怪しまれていた。
「こないだ買った染髪剤を取り出してる。　本人になりきらないとねぇ♪」
俄か上機嫌でＰＣから染髪剤を取り出し、銀髪の髪を茶髪に染めていた。

ぶおぉ～！　＿@＝　≡≡３　Ｆヾ（　ｌ　）ノ　髪の毛セット中♪

およそ5分もしないうちに、ロヴェンの髪が茶髪になっていた。
彼曰く、なりきりするなら徹底的にしないとな☆がモットーらしい。
「後はこのマスクをつけて♪」
またまたロヴェンは、鼻歌を歌いながら、一度外したマスクをもう一度つける。
確かに染髪するならマスクは邪魔なので外すが・・・。
すると、たちまちルレルトの周りに人が集まりだした。

「ハッカー☆Ｊだぞ！！」
「きゃぁ～～☆　ハッカー☆Ｊだわ！！」
「今ネットで話題のハッカー☆Ｊじゃないか！！」

「うほっw　本物キタ――――（゜∀゜）・――――！！！」

ロヴェンがマスクをつけ、学生に向かって手を振っている。
ルレルトはロヴェンが何したいのかよく分からなかった。
ただ、学生だけがロヴェンの周りに集まりだし、学生たちはキャーキャー騒いでいる。

学生に囲まれながらも、ルレルトに耳打ちをするロヴェン。
「すまん・・・この間、ハッカー☆Ｊのイメージ像をリアルそのまま投稿してしまったらこうなった・・・（笑」
その問いに対し、ロヴェンに耳打ちするルレルト。
「ロヴェン、お前何がしたいんだよ？　まさか外部の掲示板じゃないだろうな？」
「心配するな、イメージ像は学内の奴らしか見れないよう設定しているからな」

するとその時だった。
一瞬、ほんの０．５秒くらいだろうか。
ロビー奥側に知り合いが通り過ぎるのをちらっと見た。
間違いない。前髪は、茶髪、後ろ髪が銀髪。
見た目サーファーが趣味の黒っぽい肌。
ルレルトは確信した。
（ラルツ＝メガテン・・・・・・行方不明のハッカー・・・ＶＢでよくツール作ってた人・・・・・・）
「ごめん、ロヴェン。　ちょっと用事思い出した！！」
ルレルトは、まだまだＪになりきっているロヴェンに肩を押し人盛りとは逆の方向に走り去った。
すなわち一瞬見た知り合いが通り過ぎた方向へダッシュをした。
走りすぎるルレルトを見てハッカー☆Ｊになりきっているロヴェンが、口を開く。

「こっちは任せておけ、ルレルト・・・・・・さて、お祭り騒ぎしにいきますかと、その前にレニィの居場所を突き止めてからだな」
ロヴェンは、まるでルレルトの行動を把握していたようだ。
ロヴェンには未来起こることを正確に見抜き、今このときから行動する習性がある。
（二つの像と一つの鏡は意味はこういうことか）
ロヴェンは何か起ころうとするとき、夢でそのヒントを見るときがある。
今回は、学校へ行く前日に、二つの像が写っている夢を見た。
二つの像、つまり別れて行動せよという暗示だとロヴェンはすぐに見抜いた。
そして鏡、鏡はどうやらロヴェンがいうには知り合いらしい。
知り合いが側に通るから、別れて行動せよと瞬時に理解し、あえてハッカー☆Ｊになりきり、その瞬間が訪れるのをずっと待っていた。
そしてその瞬間がやってきた。

＊＊＊

途中まで、パイソンと一緒に偽装チェッカーの範囲を増やしていたのだが、
効率のことを考えて、パイソンとは別れて一人範囲の増大作業を行っていたＶＢ。
「Ｊａｖａ先輩、サーチ完了しました！！」
ＶＢが無線通信機を通じて、Ｊａｖａに報告した。
ＶＢに命令が届いたのは、最後の偽装チェッカーで学校構内全域になるよう設定してから、３０秒あとのことだった。
ＶＢはすかさずサーチし、偽装チェッカーで、偽装されているＩＰアドレスを見破った。

”Ｍｅｄｉａ：ＵＳＢフラッシュメモリ８ＧＢ
ＩＰアドレス：Ｈａｃｋｅｒ｜Ｊ．ｓｈｏｕｔａｉ｜ｈｉｍｉｔｓｕ．７９４２．００１２６３
ＧＰＳ：Ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙ／Ｒｏｕｋａ／（７４２，１３９）
”

偽装チェッカーは組織にとっては有難いものだ。
なぜかというと、相手の居場所を瞬時に分かるＧＰＳがついているからだ。
いくら相手がハッカーであろうと、ＧＰＳにはかなわない。
ＧＰＳに嘘は通じない。
ＧＰＳは、まず組織、次に具体的居場所そして最後のカッコが相手がいるＸ軸とＹ軸であらわされている。

「ＶＢ、よくやった！！」
無線通信機を通じて、部下を褒めるＪａｖａ。
「私はこれからＧＰＳが示されている場所へ様子を見に行きます」
「そうしてくれ！頼んだぞ」
ＶＢは無線通信機を切って、ＧＰＳが指し示されている場所へと向かった。
（何故、あいつが・・・・・・）
自分では分からない感覚にまた襲われた。
最近ＶＢは、このハッカー☆Ｊ捕獲作成に加わってから、ずっとネックになっていることがある。
それが何か分からないまま、作戦に参加し続け、とうとう正体を突き止めるまで来てしまった。
自分の中で何かが引っかかる。
自分では記憶喪失なんかじゃないのに、何故かそんな感覚が生まれてきた。

無意識のうちに無線通信機を切ってしまう。
（俺はあいつを知っているようで知らないようで知っているような気がする・・・・・）
どうにもこうにも行かないので、ＶＢは言ってしまった通り、居場所へと向かうことにした。

＊＊＊

「Ｊａｖａ、見つけたわよ！！」
無線通信機を通じて、Ｊａｖａに連絡を入れるパイソン。
「ぇ？さっきＶＢから見つけたの報告を受けたばかりだぞ？？　というかＶＢとは別行動か？」
「ええ、効率を考えてそうしたの。　見つけたデータそっちに送るわね」
パイソンは、ハッカー☆Ｊらしきものを偽装チェッカーで見破ったデータをＪａｖａに送信した。

”Ｍｅｄｉａ：ＵＳＢフラッシュメモリ８ＧＢ
　ＩＰアドレス：ＨａｃｋｅｒＪ｜ｊｉｔｕｈａｂｏｋｕ．１２４５．ｏｄｏｒｏｉｔａ？．５４３１
　ＧＰＳ：Ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙ／Ｒｏｕｋａ／（７４１，１３９）
”

このいかにも怪しい偽装チェッカーで見破ったアドレスを見て、Ｊａｖａは困惑する。
何故２つ？
ついさっきにＶＢからデータを受信したばかりだ。
「偽装チェッカーが２つに反応するとは意外だな」
「あらもう報告受けたのかしら？　まさかの展開ね」
それにしても意外だった。

こちらの計算では、一つだけ引っかかりそれを探索しようとしていたのだが、
まさか2つも引っかかるとは。
居場所からして、ＶＢが報告した位置よりも近かった。
「居場所近いんなら、どれか一つだけ探索すれば出てくるでしょ？」
「確かにそうだな・・・・・・・」
ＶＢはＶＢでやっているので、Ｊａｖａは、パイソンから報告を受けたアドレスの調査に乗り出した。
調査してまもなく、偽装チェッカーが激しく反応し始める。
チカチカと赤く点滅する偽装チェッカー。
「パイソン、至急合流だ！！　偽装チェッカーのＧＰＳチェックが反応してる！！」
偽装チェッカーのもう一つの機能。
それがＧＰＳだ。対象が、半径１００メートルを切ると、偽装チェッカーが赤く点滅する仕組みになっている。
しかも徐々に赤い点が今いる体育館の倉庫裏に近づいていた。
「え、誰か来るぞ！！」
「あら、今体育館倉庫裏についたわよ」
いいタイミングで、Ｊａｖａとパイソンは合流した。
パイソンは内心びっくりしつつもいつものように冷静だった。
さらに音を大きく知らせる偽装チェッカー。
ついに最大音量で警告をピピピピピーと発する。
そのときだった。
ドアがこじ開けられた。
そこには2人の影がはっきり分かるようシルエットのように映し出されていた。

＊＊＊

知り合いの男、ラルツを見かけたルレルトは必死に走る。

息が切れてもおかまいなしに、ラルツが向かった方向へ走った。
自分お手製のＰＣでラルツの居場所を調べ、
点滅している黄色の点に沿って追いかける。
その黄色い点が途中で止まった。
つまり対象が移動するのをやめたことを意味する。
やがて、ルレルトもその地点である誰も使用していない視聴覚室に到達。
息を切らしながらも、ドアをバタンと開けた。
「お久しぶり、行方不明のラルツさん」
ハッカー☆Ｊのマスクをかぶったルレルトが発した最初の一言。
やはり目の狂いはなかった。
懐かしい顔。
久々会った顔。
そこに映し出された顔は間違いなくルレルトがよく知る顔だった。

＊＊＊

ルレルトと別れて、ロヴェンはまず、行方不明のレニィの位置を調べた。
ロヴェンのＰＣはルレルトよりも性能がよく単語を打つだけで１００％対象を搾り出す。
りんごと打ったら、どこどこ産のりんごはこのお店で売られていますと返事を返し、
更にはお店の位置まで正確に表示する。
早速ロヴェンは、レニィとＰＣに打ち込んだ。

”レニィ　女性　先遣隊の一人で裏では違法なことをしていなか見張る学校の組織に所属。
　現在の居場所は、５Ｆハイラルの塔幻の５４４号室机２０列目最後尾ロープを縛られているようです”

「よりによって入り口の探しにくいところか・・・・・」
幻のとつく号室は、大抵入り口が分かりにくい場所にある。
普段学校生活を送っている場合には、噂程度にしか耳に入ってこない。
つまりそういう教室があるだけで、実際何に使われ、どうしてこう分かりにくいのかは知らない。
勿論場所も分かりやしない。
そんなロヴェンが何故この場所を知っているのかは、以前ハッカー☆Ｊことルレルトと一緒にこの地に赴いたことがあるからだ。
丁度そのときは、人探しを依頼され、居場所がここだったのだ。
「マイＰＣ、幻の５４４号室の入り口は？」
自分で見つけるのが面倒なため、ＰＣに打ってみた。
”９マス×９マスのパズルを解き、２５番目、２９番目、３５番目、５３番目、６３番目、７２番目の文字及び記号を抽出。
パズル解きましたけど、表示しますか？”
わずか５秒足りずでロヴェンのＰＣは、といてしまった。
そのＰＣの問いに関して、勿論ロヴェンが出した選択は決まっている。
「Ｙｅｓ」
Ｙｅｓと応答し、答えを表示する。
その答えが意外なものだった。
”ラルース学園”
拍子抜けで口をぽかんと開けっ放しのロヴェン。
「学校の名前（笑」
セキュリティ上どうなのかと言うと、問題といえば問題だ。
答え言ってるようなものだし。
だが、人に知られていない上一部の人間しか出入りできない部屋だ

からそう問題ないのかと開き直った。
「上るの面倒だし、転送よろしく、マイＰＣ」
すると、ＰＣから転送用の魔方陣が描かれた。
幾何学模様がロヴェンの下を描き出し、シューという音を立てて、ロヴェンの姿を消していく。
やがて、そこにはロヴェンのいた形跡すらなく跡形もなかった。

「到着」
ロヴェンがいるのは、先ほど自分のＰＣに検索させた幻の５４４号室の入り口手前だった。
もう既に難問の（？）パズルを解いており、あとはドアを開けて、中にいるターゲットレニィを助け出すのみとなった。
ドアには何やらわけの分からない天使と悪魔の絵が描かれていた。
色は灰色で見かけ上ドアを開くにもかなりの力を使いそうな重々しいドアだった。
しかし力に関してはピカ一のロヴェンには、関係なかった。
ドアを片手にかざしただけで、ドアが勢いよくバタンと開いた。
「ターゲット発見、大丈夫かい、お嬢さん？」
ＰＣの言われたとおりに、机２０列目の最後尾でロープで縛られているレニィらしき女性を発見した。
パチンッ　（（“ｏ（｀－＊）
ロヴェンが指を鳴らすと同時に、レニィのロープが解け、レニィは再び自由に動けるようになった。
「あ・・・有難う・・・・・・ええと」
レニィが困惑しているその隙にロヴェンは自分が何者かを名乗る。
「おっと失礼。　Ｈａｃｋｅｒ☆Ｊ＋αです（｀ー＋｀）」
「レニィ、噂で聞いたことある。　ＰＣクラッシュさせてる人でしょ？」
「まぁ、正解に近いが、実際にやってるのは本物のＪだよ。　本物は今頃どこぞのお兄さんと戦ってるころだよ」

「ふぅ～ん、ぁ、そうそう極秘の任務で名称未定を壊滅させなきゃいけないの、そしたらふけた親父に捕まっちゃって、ここにいるの」
レニィは事の次第をＨａｃｋｅｒ☆Ｊになりきったロヴェンに打ち明ける。
ふけた親父が誰を意味するかは分からないが、ロヴェンのＰＣにはお見通しだった。

”ふけた親父　アシュラス　コードネーム：Ｊａｖａ　アンチハッカーを目的を掲げた株式会社名称未定に所属。
　まだ２９歳にもかかわらず見かけが４０後半に見えることからそう呼ばれるようになった哀れなお兄さん”

ロヴェンのＰＣにレニィが面白い反応を示す。
「あなたのＰＣって何でもお見通しなのねぇ～。　そうよこいつこいつ」
レニィが映し出されたＪａｖａの顔に指を差し、うんうんとうなづいた。
「偶然、目的が一緒なんだが、華麗なショーを見に行くかい？」
華麗なショーつまり株式会社名称未定の壊滅に当たるわけだが、Ｈａｃｋｅｒ☆Ｊはなぜかといつも洒落た表現をする癖がある。
「レニィ、うれしーい。　どう壊滅させるのか気になった。　いくいく」
確かにそういわれるとどう壊滅させるのかが気になる。
彼らの目的はいつの間にか、組織壊滅ということになっていた。
勿論本物のＪも知らない。
「ふけた親父の居場所」
ロヴェンはそういい、レニィと一緒に行動を共にする。
ＰＣが居場所を探索し、また幾何学模様が現れ、二人の姿を瞬時に消した。
そして幻の５４４号室の扉は閉まり、暗号は初期の状態に戻ってい

る。
そこには先ほどまで人がいたなど思わせないように。
2人が到着したのは、体育館倉庫裏入り口手前だった。
ロヴェンは目の前にあるドアノブを握る。
そして扉が開いた。

第５話：～Ｔｈｅ　Ｃｏｎｔａｃｔ～ＩＩＩ（後書き）

本当は昨日あげようかと思ってましたが、
ちょっと動画作ってたため、今日になってしまいましたＯＴＬ
すいません＞＜。
次回から漸く第６話です。
終盤が近づいています♪

第６話：～Ｔｈｅ　Ｆｅｓｔｉｖａｌ　Ｉ　～（前書き）

長い間更新とまってしまいましてすいません＞＜。
遅くなりましたが、あけましておめでとうございます。
本年もよろしくお願いしますｂ

さてさて、ついに第６章大詰めの部分に
差し掛かってまいりました。
ルレルトたちの運命はいかに！？

第6話：～The Festival I ～

「お久しぶり、行方不明のラルツさん」
視聴覚室に移動して、ドアノブを開けてしまった。
懐かしい顔がそこに移されている。
一方ラルツ、ＶＢは窓を眺めてルレルトの言葉に反応した。
「誰だ？」
ラルツは窓の景色を見るのをやめ、くるりとルレルトのいるほうへ振り向いた。
「本当に記憶喪失になってるみたいだな、俺だよ、俺」
ルレルトはつけている仮面を取り、反応をうかがった。
知人だったら何かしら反応を示すもの。
それを期待していたルレルトだが、相手の反応は何も返ってこなかった。
「・・・・・・・」
分からない、目の前にいる奴が分からない。
知っているか知らないか分からない。
その思いだけが、ラルツの心に流れ、口にはできなかった。
「だったら質問を変えよう。　俺に初めて教えてくれたＶＢのソースコードは？」
人の記憶が一時期に失われているのなら、本人にとって衝撃的なことを聞くことによって少しでも思い出される場合がある。
何せラルツは昔も今もプログラマーというよりハッカー。
この俺が衝撃的なことを相手に与えてる自信ならある。
何せ目の前にいる本人にプログラム教えてくれと１６００通くらいメールを送っている。

事の成り行きは今から丁度５年前のことだ。
当時、ラルツが、とある企業のセキュリティを破られたものの情報

流出を防いだことに始まる。
ラルツは数少ないＶＢのプログラマーだった。
ＶＢは初心者用が使うプログラムとして他のプログラムとはやや性能が劣っていた。
セキュリティを伴うプログラムなんて組めるわけないとされ、他の言語で組まれてるプログラマーたちから敬遠されていた。
企業の情報流出の事件も多い中、ラルツは組めるはずがないとされていたＶＢで強力なプログラムを組む。
それがニュースで流れ、そのときから、ラルツの知名度は格段に上がっていた。
そのことを知ったルレルトは、まだ当時プログラムなんて全然興味がなかった。
ＰＣでは、ネットサーフィンをする程度で、プログラムって何ですか？というレベルだ。

この事件を見て、ＶＢが初心者に向いたプログラムと知る。
それから、ラルツ本人にメールを送り始める。

さすが、有名人。
送っても送っても返事が返ってこなかった。
自分もラルツのようにプログラムを組みたい。
その思いだけで、メールを送り続けた。
偶に、こんな初心者相手にしてくれるだろうか？と不安になったりもした。
だが、プログラムを組みたいという信念に軍配が上がり、それを糧としてひたすら送り続けていた。

かれこれ送り続けて半年になるだろうか。
メールの送信数が１６００になろうとしていた。
ルレルトはさすがに送りすぎだろうと思い、今日この１日メールが

こなかったら諦めようとしていた。

拝啓　ラルツ様
初めまして、貴殿のニュース拝見いたしました。
私はプログラムをはっきりいって知らない人間です。
だが、貴殿のニュースにより私も貴殿のようにプログラムを組みたいと思い始めました。
覚悟ならいくらでもします。お願いします！！
もしよろしければ、貴殿に教えてほしいです！！！

ルレルト

この最後のメールを送り、ルレルトはＰＣの前で１時間他の作業をしながら待った。
そして２時間・・・
４時間・・・。
もう６時間くらいが経ち、あと１分で翌日になるところで、

ルレルトのＰＣの画面にポップアップがでていた。

一メールを１通受信しました

来た
半年の時間を来て来た
待っていたメール
ルレルトはやったーーーーという思いでＰＣの目の前で万歳三唱。
早速メールの中身を空けてチェックしてみる。

―ハッカー☆Ｊ様
―
―初めまして＾＾
―ラルツです。
―この僕に１６００通もメール送る奴の顔が見てみたいです。
―それほど送るのなら本気でプログラムをやりたいようですね。
―分かりました。
―受けてたちます
―
―この場所に来てください。　↓ＭＡＰ
―ＰＣは余ったのをあげるので存分に使い倒してください
―それでは、楽しみにしています
―
―ラルツ

そして、ルレルトはラルツの家に修行の身として転がり込んだ。
一番初めのプログラムの授業は・・・・・・・・
そう、この問いの答えでもある。

ルレルトが回想しているのと同時にラルツも回想していた。
記憶喪失な彼も、何故だか知らぬが株式会社名称未定以外の記憶を思い出せるようになる。
以前は名称未定以外の記憶を思い出そうとすると激しい頭痛に襲われとてもじゃないが、
思い出せるようになっている。
知らない、知らないといいはる自分。

だが走馬灯のように名称未定以前の記憶が彼の脳内にどっと流れてくる。
（確か、目の前にいるＪに教えて始めてのソースコード）
もう一人の自分が囁く。
「１６００通、メール」
漸く単語を発した。
懸命に発する単語。
やがて唇がスムーズに動くようになる。

フッ。
安堵するラルツ。
「ｍｓｇｂｏｘ”Ｈｅｌｌｏ，Ｗｏｒｌｄ！！”　&ｖｂｃｒｌｆ　&”Ｈｅｌｌｏ，ｗｏｎｄｅｒｆｕｌＶＢ！！”」
完全に名称未定以前の記憶を思い出した。
「久しぶり、ルレルト。いや、本当のハッカー☆Ｊってところか」
「記憶が戻ったんですね、ラルツさん。　戻ったところ悪いけど・・・」
ルレルトが次のことを言いかけた瞬間。
ラルツが正確にルレルトの言わんとすることを付け加える。
「名称未定の壊滅・・・だろ？　俺、一応こう見えて先遣隊の一員だからね」
なんということだろうか。
行方不明のラルツは、レニィが所属するあの先遣隊の一員だったのだ。
「作戦が失敗して、気が付いたらここでこうして、君が来たんだよ」
先遣隊もルレルトが密かに壊滅させようとしていた株式会社名称未定の壊滅を望んでいた。
ラルツの話によると、これまで幾人かの先遣隊員を株式会社名称未

定に潜り込ませていたが、
全て失敗に終わり、ラルツのように命あるものもいれば、場合によっては亡くなっているケースも少なくない。
ラルツの場合も作戦は失敗し、ラルツは捕虜とされ名称未定でプログラムを組まされていた。
「行こう、ハッカー☆Ｊ」
「あぁ、確か友人もそこにいる。　これで転送する」
ポケットから取り出したのは、ルレルト自身が作った転送装置だった。
「その転送装置、ソースコードはＶＢだな？」
ＶＢのことなら、何でもお見通しのラルツ。
ラルツはそれほど好きでＶＢにのめりこんだ証でもあった。
この転送装置はＶＢのソースコードからなり、ターゲットを指定範囲へ瞬時に飛ばすすぐれもの。
ルレルトとラルツは、友人ロヴェンのいる座標を指定し、ロヴェンのいる場所へと向かった。

＊＊＊

ドアノブを握りドアを開けて入るロヴェンとレニィ。
Ｊモードになりきっているロヴェンは更にテンションをあげる。
「ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ！！　こんにちは、ご機嫌麗しゅう」
そう高らかな声で、Ｊモードに浸りきっているロヴェンは、そういうと同時に指をパチンと鳴らす。
ッ　（（„ｏ（｀－＊）

「くそ、格好からしてＪだな？」
そう反応したのはロヴェンのＰＣでふけた親父で検索されたＪａｖａだった。
「Ｊａｖａ、メインＰＣが動かなくなってるわよ！！　ちょっとＪ、このＰＣに何をした！！！」
隣にいたパイソンまで反応を示す。
Ｊモードになりきっているロヴェンは、今まですぐ動かしていた名称未定のＰＣを使用負荷状態にし、
ＰＣをオーバーヒートさせ、二度とＰＣを使えない状況にしていた。

「ざ　ん　ね～～～ん、僕はＪじゃない。　Ｊのコスプレが好きなただの通りすがりの好青年さ」
（ロヴェンさん、何か違う人みたいです・・・）
密かにレニィは心の中でつぶやいた。

Ｊａｖａとパイソンが同時に突っ込む。
「どこが、好青年だ！！　変な喋り方しやがって！！！」
「そうよそうよ、壊れたＰＣどうしてくれるのよ！！！！！」
「そんなの～～僕は、知らな～～～～～い」
ふざけているような変な口調でＪになりきっているロヴェンが、続けた。
全く感情もこもっていないロヴェンの喋り方に、Ｊａｖａとパイソンは怒りを通り越し、あきれ果てていた。
何なんだ、こいつは？と。

そんなときだった。
体育館倉庫裏の薄暗い明かりが消え、完全に真っ暗になる。
何事だ何事だと名称未定の２人は騒ぎ始めるが、そこで音楽が流れる。
スピーカーもついていないのにどうやって流しているかは当の本人

からしかわからない。
チャラリラ～と音楽が流れてきた。

―初めまして、名称未定のみ　な　さ　ん
―僕が本物のハッカー☆Ｊだ
―どうやらそこにいる依頼者に嫌がらせをしたみたいだねぇ
―嫌がらせは駄目だよ、嫌がらせは。
―あ～～あとぉ～～、言いたいことがある人が一名いるので変わる

Ｊａｖａもパイソンも聴いたことある声だった。
二人そろって、
「ＶＢ！！」
と叫ぶしか反応できない。

―先輩、思い出しました
―先遣隊一員ラルツ、あなたたち、いや会社を壊滅させます。
―今回は特別にハッカーＪに依頼を要請しました
―覚悟

今までスピーカーもないのに流れていた音声がぷつりと途切れ、さっきまで消えていた
薄明るい明かりが点灯し始めた。
そして、Ｊａｖａとパイソンは信じられない光景を見る。
「同じ格好、同じ声の奴が２人」
「ＶＢまであいつと同じになるのか、あいつと同じ裏切り者に！！！！！」
それに対してレニィはずっと黙っていた。
チャット仲間だった人が自分を落としいれようとしていた。
更に驚いたことには、先遣隊のラルツだった。
嬉しいのか悲しいのか両方の気持ちが混じり、今はただただ黙って

いる。

そして、長い戦いが始まろうとしている。

第６話：～Ｔｈｅ　Ｆｅｓｔｉｖａｌ　Ｉ　～（後書き）

読んでくださり有難うございます♪
更新ゆっくりめになりますが、完結まで
頑張りますｂ

どうぞＨａｃｋｅｒ★Ｊをよろしくお願いしますｂ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0208f/

Hacker☆J

2010年10月9日14時33分発行